

令和 2 年 5 月 31 日現在

機関番号：32621

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05604・19K20811

研究課題名(和文)ロシア語の語彙力増加法 - 動詞接頭辞の意味学習を通じて -

研究課題名(英文)A method for increasing vocabulary of Russian using learning the meanings of verb prefix-

研究代表者

佐山 豪太 (Sayama, Gota)

上智大学・外国語学部・助教

研究者番号：60824480

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では動詞接頭辞 - の意味を5つに分類し、100万語コーパス内における意味毎の頻度を計測した。その目的は、学習者が出会う機会が多い、学習価値の高い意味を選定するためである。分析の結果、まず学習すべき意味としてRESULTが挙げられる。体のペアの学習時に不完了体から完了体を形成する接頭辞としてのこの意味を、学習者には意識させるべきである。続くSTARTであるが、これも移動動詞と密接な関係にあるため、導入する価値は低くない。一方で、DISTRIBUTEやSLIGHTなどの参考書が提示する他の意味は、高頻度語の中で現れる機会は少ないため、初級の段階では導入する必要性は低いことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、ロシア語の教材や授業で動詞接頭辞は扱われていない。本研究はその中でも最も高頻度に使用され、動詞の体のペア形成に関わる - を分析した。結果、学習価値の高い - の意味としてまず RESULTが挙げられる。これに続く2. STARTであるが、これは移動動詞と密接な関係にある。SOMEの生起頻度も低くはない。一方で、他の意味は高頻度語の中で現れる機会は少ないため初級の段階では導入する必要性は低い。上記分析結果は語彙力増加と動詞の体の理解のために、 - を教科書や授業で導入すべきであると主張するに足るデータを提供していると考えられる。

研究成果の概要(英文)： In this research we classified the meanings of the Russian verb prefix - into five and measured the frequency of each meaning in one million-word corpus. Our purpose of the analysis is selection of the meanings of the verbal prefix - worth learning.

The results show that the meaning "RESULT" being most frequently used for creating aspect pairs of Russian verbs is most worth learning because of the very high frequency. The meaning "START" is the second frequent meaning (it is often used for derivation of verbs of motion with the prefix -).

On the other hand, the results reveal that other meanings such as DISTRIBUTE and SLIGHT are not necessary to be introduced at the beginning level, because they rarely appear in high-frequency words of the corpus. Therefore, they are less worth learning.

研究分野：応用言語学

キーワード：語彙学習 動詞接頭辞 ロシア語 派生接辞

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

外国語教育において語彙学習・指導は副次的な地位を占めている場合が多い。教育機関で語彙指導が授業で体系的に行われることはなく、あくまで学習者個人の活動と捉えられている。日本で出版されたロシア語の教科書の内容からすると、おおまかに言って、言語学習は語彙・音声・文法(形態論・統語論)から成るように記述されているが、その中で語彙に割かれる注意は少ないと言えよう。

ロシア語教育には授業数が少ないという環境的な問題が存在する。そのような状況の中で、形態的に複雑なロシア語の学習は文法中心(特に屈折の習得)になりがちである。一方で、語彙項目の数は膨大であるにも関わらず、その学習は授業でほとんど触れられることはない。そのため、語彙力を伸ばすには何らかの効率的な方略が必要であると考えた。

そこで、ロシア語の効率的な語彙学習を検討した際、著者は派生接辞の知識が役立つと自身の研究を通じて考えた: 語形成辞典において、本源形に対して派生語の数が全体の約9割に昇るという事実からわかるように、ロシア語は派生語の含有率が極めて高い。つまり、語彙の大半が派生語であると言える(実際、高頻度を分析してみると、そのような結果が得られている)。これまで先行研究が述べているように、ロシア語教育における語形成の重要性は明らかに高い。また、これまで自身の研究を通じて、効率的にロシア語の語彙力を伸ばすには派生接辞の学習が効果的である、という理論的な結論は得られていた。

2. 研究の目的

これまでの自身の研究を通じて、動詞接頭辞 *no-* は群を抜いて生起頻度が高く、派生語に含まれる個数が多いことは確認できていた。この研究は、高頻度語における各派生接辞の使用頻度と実質的な生産性(派生語に含まれる個数)を調査し、それらをリストアップしている。この2点から判断すると、書き言葉コーパスである Russian National Corpus-Main (以下、RNC-M) と話し言葉コーパスである Spoken (以下、RNC-S) の高頻度語 5,000 内で最も用いられている接頭辞は、その大半が動詞に付加されるものであった。

結果は以下の通りである。

表1. RNC-M と RNC-S の高頻度 5,000 語内における接頭辞の生起頻度と個数(頻度順)

順位	接頭辞	基本形の品詞	RNC-M		順位	接頭辞	基本形の品詞	RNC-S	
			生起頻度(100万語換算)	実質的な生産性				生起頻度(100万語換算)	実質的な生産性
1	по-	動詞	7,498.3	108	1	по-	動詞	9,694.5	140
2	с-	動詞	5,468.8	70	2	с-	動詞	5,794.4	79
3	у-	動詞	4,658.3	62	3	при-	動詞	4,388.3	37
4	вы-	動詞	3,750.5	54	4	ни-	代名詞	3,957.4	9
5	при-	動詞	3,012.4	42	5	у-	動詞	3,431.0	56
6	за-	動詞	2,987.0	67	6	за-	動詞	3,257.4	81
7	на-	動詞	2,487.6	30	7	вы-	動詞	3,148.7	72
8	ни-	代名詞	2,484.4	7	8	на-	動詞	2,224.7	40
9	раз-	動詞	2,400.5	43	9	раз-	動詞	1,868.4	38
10	от-	動詞	2,141.1	33	10	от-	動詞	1,734.0	41

上記表では動詞接頭辞の項目は灰色に塗ってある。表からは、上位10の接頭辞の内そのほとんどがこれに該当することがわかる。この分析結果から、動詞接頭辞は数多くの派生語の形成に用いられており、ロシア語における語彙の拡充の役を担っていることがわかるが、その中でも動詞接頭辞 *no-* は、群を抜いて生起頻度と実質的な生産性が高い。したがって、語彙力増加の目的で *no-* を学ぶ価値は高いと考えた。また、*no-* は体のペア形成において非常に重要な位置を占めているため、本研究ではこれを分析対象とした。

3. 研究の方法

3.1. *no-* の意味記述

研究書や参考書で当接頭辞の意味がどのように記述されているのかをまとめたアカデミー文法(АН СССР 1980: 366-367)によると、動詞接頭辞 *no-* は以下の5つの意味を有している。

(1) АН СССР (1980) における動詞接頭辞 *no-* の意味群

- a. 結果に及ぶ動作: послушать 「聴く」
- b. 短時間に行われる動作: покурить 「しばらく喫煙する」
- c. 開始を表す動作: подуть 「吹き始める」
- d. 全てまたは多数の対象に及ぶ多回・順々の動作: поглотать 「多数を幾度にも飲み込む」
- e. 軽度に行われる動作: попортить 「少し損傷する」

また, Janda et al. (2013: 93-94)の研究は, *no-*は RESULT, SOME, START, DISTRIBUTE といった意味を有しており, RESULT と SOME がその主要な意味であると規定している。

(2) Janda et al. (2013)における動詞接頭辞 *no-*の意味群

- a. RESULT: посмотреть 「最後まで見る」
- b. SOME: поплакать 「しばらく泣く」
- c. START: полюбить 「好きになる」
- d. DISTRIBUTE: побросать 「すべての/多くの~を投げる」

Janda et al. (2013)によると, a の RESULT は体のペアとなる完了体動詞を形成する際に用いられる最も代表的な意味である。説明や用例から判断すると, これは AH CCCP (1980)の(1)_a.に対応している。b. SOME は通常「しばらくの間~をする」を表す際に用いられるが, これは(1)_bに相当する。c. START は動作の開始を表し((1)_c に相当する), d. DISTRIBUTE は多くの, もしくはすべての対象が影響を受けることを表す((1)_d に相当する)。

上述の AH CCCP (1980)と Janda et al. (2013) は言語学の研究書であるが, 次に語彙学習の観点から, Златоуст 社から出版されている参考書が *no-*の意味をどのように提示しているかを確認する: Барыкина и Добровольская (2015)は 21 の動詞接頭辞を提示している。これらの接頭辞は学習者にとって困難なロシア語の文法項目であるとし, その習得には体系的な学習が求められると述べている。また, 当参考書は, 動詞接頭辞の学習の困難な点として, 数の豊富さ, 意味の多様性, 語彙的・統語的な結合の法則, 文脈内における使用といった点を挙げている。当参考書は *no-*の意味として, アカデミー文法よりも 2 つ多い, 7 つを挙げている。

(3) Барыкина и Добровольская (2015)における *no-*の意味

- a. 1 回の動作・限界への到達: посмотреть 「見る」
- b. しばらく続く動作: полежать 「しばらく横たわる」
- c. 動作の開始: пойти 「出発する」
- d. 大量の人やものに波及する動作: попрягаться 「多数・全部が隠れる」
- e. 軽度の動作: попортить 「少し傷つける」
- f. 特徴の付与: порозоветь 「バラ色になる」
- g. 表面のカバー: позолотить 「金色にする」

上記 a. は規則性・生産性が高いとされ, AH CCCP (1980)の(1)_a, Janda et al. (2013)の(2)_a. に相当し, 他に, 完了体動詞である *поблагодарить* 「感謝する」, *поцеловать* 「キスする」, *повиснуть* 「ぶら下がる」などがその例として挙げられている。b. は(1)と(2)_b. に対応し, 他に *поспать* 「しばらく眠る」, *пожить* 「しばらく暮らす」などが例として挙げられている。c. は(1)と(2)_c. に対応し, 他に *поехать* 「(乗り物で) 出かける」, *поплыть* 「泳ぎ始める」, *полететь* 「飛び立つ」などがここに分類される。d. は(1)と(2)_d. に対応しており, 他の例として *поумирать* 「(全員・多数が)死ぬ」, *побить* 「(多数・全員を)殺す」などが挙げられている。e. は(1)_e. の意味に相当し, 他に *поотстать* 「少し遅れる」, *пообсохнуть* 「少し乾く」などがこの意味には含まれる。

なお, f. と g. の意味は研究書である(1)と(2)には欠如しているように見えるが, これらの意味は両者の a. に分類されると考えられる(詳解辞典では *розоветь* – *порозоветь*, *золотить* – *позолотить* は体のペアとして提示されている。Барыкина и Добровольская (2015)は意味をより細かく分類し, (3)_f. と g. を, (1)と(2)_a. とは別のものとして捉えているが, より大きな枠組みでは上記 a. に含まれるのだと予想される)。

ここまで, 接頭辞の意味分類を概観してきたが, 研究書や参考書によってその数は異なっている。ただし, 接頭辞の意味分類に関してそもそも厳密な規定は存在しないため, 「『複数の意味, もしくは 1 つの意味のどちらが良いのか?』という問題には終わりが無い」(Кронгауз 1995: 34-35) と言えよう。また, Зализняк (1995: 144) は, 意味の分類において「どの接頭辞も 1 つの意味, それとも, 複数の意味を有しているのか? もし接頭辞が多義と認められるなら, 異なる意味の間にしっかりとした関係性は存在するのか? <...> 接頭辞の意味間にどう境界線を引くのか? 」といった問題が提起されると述べており, 意味の個数に関する議論は成立自体が難しいことがわかる。とはいえ, Барыкина и Добровольская (2015)のように, 精密さを重視して体系的に *no-*の意味を教科書や参考書に導入する方略が, 教育的な観点からして効率的であるかには疑問が残る。言語学的な記述を体系的に学習用の文法に持ち込むやり方は一考を要すると言えよう。例えば, Барыкина и Добровольская (2015) は参考書であるが, (3)が示す意味全てが学習上同じ価値を持つとは考えづらい。あくまで経験則であるが, (3)_a, b, c, e で *no-*は付加される頻度が多いと考えられ, a. に関しては動詞の体形成で用いられる, 重要な意味でもある。

しかし, これは客観的事実に基づいた意見ではなく, あくまで主観である。そこで, 教育という文脈で扱っても良い(学習価値の高い) *no-*の意味がどれであるかを数量的に確認した。

3.2. 分析手法

ここでは Sketch Engine を用いて, まず RNC-M の構造を模して自作した 100 万語コーパスに

て *no-*を含んだ完了体動詞の用例をすべて抽出する (concordance 機能で正規表現 (**no.*) を使用し, 品詞を「動詞」に限定して例を抽出する. そして, *понимать* や *подходить* といった, 動詞接頭辞 *no-*が分析できない動詞を削除する). なお, 本稿では分析対象は 100 万語コーパス内で生起頻度が 50 を超えた動詞に限定した. 閾値を 50 とした言語学的な根拠はないが, これは接頭辞の意味の検証に十分な用例が確認できる数値であると言えよう. また, 生起頻度が低く (学習者があまり出会う機会のない), 学習価値の低い動詞まで分析対象に入れる必要はないと考えて, この閾値を採用した.

次に, 得られた結果をコンコーダンスラインで保存する. そして, 前後の文脈を確認し (各意見に特徴的な意味構造と共起語を参考にして), 各意味の生起頻度を計測する: 例えば, *повезти* は, *везти* 「運ぶ」に *no-*が付いて *повезти* 「運び始める」となる場合 (a.) と, *везти* 「運が良い」に *no-*が付いた完了体のペアの場合 (b.) がある.

(4) a. Вы *повезёте* его в Багдад?

「あなたはその人をバグダットへは運んで行く (運び始める) のですか? 」

b. А мне здорово *повезло*, но это не моя заслуга.

「僕はとても運が良かったのだけど, それは僕の功績ではない」

(自作 100 万語コーパスより引用)

a. は START の意味で, b. は RESULT の意味で基本形に付加されている. このように同じ形式に複数の意味で *no-*が付加される場合は, 前後の文脈を元に意味を確定する. 他にも, *показаться* は, 「見える, 思える」では *казаться* とペアを組み, この *no-*は RESULT の意味であるが, 「現れる」では *показываться* とペアを組むため, 接頭辞が分析できない. 「現れる」の意味での *показаться* のような例は, 前後の文脈に基づいて *no-*の分析から除外する.

3.3. 結果

分析に際して *no-*が 1. RESULT と 3. SOME のどちらで付加されているかの判別が難しい場合が複数存在した (*слушать* 「(1. *слушать* の完了体) 聴く」や 2. 「少しの間聴く」など). 本稿では, 時間を表す共起語 (*минуту* や *два часа*) といった形式的な指標がある場合は SOME に, ない場合はどちらか判別が非常に難しいため, 両方の意味 (RESULT と SOME) でカウントしている. また, *no-*が分析できないと思われる動詞の例は「不明」とした. 分析の結果は以下の通りである.

表 2. 100 万語コーパスにおける *no-*の意味毎の生起頻度

(N = 3,569 / 1. RESULT と 3. SOME への重複あり)

	1. RESULT	2. START	3. SOME	4. DISTRIBUTE	5. SLIGHT	不明
頻度	2,301	685	401	0	0	500

本稿の分析対象の中では, 半数以上の *no-*が完了体動詞を形成する 1. RESULT (*подарить*, *попытаться*, *познакомиться*) の意味で動詞に付加されていることがわかった. 次いで, *поехать*, *повезти* といった動詞に見られる 2. START の意味で当接頭辞は使われていた. 3. SOME は *слушать*, *поговорить* の中に現れる. 4. DISTRIBUTE と 5. SLIGHT の意味は, 分析対象内では確認されなかった (対象外の低頻度の動詞内に見られたが, それでもその数は限定的である).

また, この結果を受けて, *no-*の放射状カテゴリーを検討したが, 上記分析結果 (生起頻度の高さ) から判断すると, 1. RESULT がプロトタイプと考えられる (プロトタイプを規定する基準の中の一つとして生起頻度の高さが挙げられる): 動作の完了を表す 1. RESULT の意味から, 動作における開始の部分の完了に焦点を当て, 2. START が派生する. また, *про-* (~を通して終える) とは異なり, 比較的すぐに終わる動詞に 1. RESULT の意味で付加される場合があるため, そこからメタファーによる意味拡張により 3. SOME と 5. SLIGHT が派生する. 4. DISTRIBUTE に関しては, 1. RESULT の意味での *no-*が付いた動詞が話の展開を表す場合があり (~して, ~をした), そこからメトニミーによって順々に行われる動作という意味が派生すると解釈できるかもしれない.

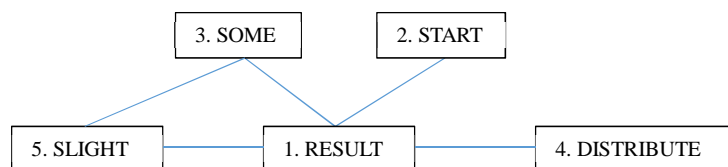


図 1. 動詞接頭辞 *no-*の放射状カテゴリー案

ただし, 上記放射状カテゴリーは検討しなければならない事項が複数存在する: 例えば, 1. RESULT から 3. SOME と 5. SLIGHT への意味の派生に関して, この接頭辞は比較的すぐに終わ

る動詞以外にも付加される例もあるという問題がある。そのため、*no-*の意味群は独立して存在しているようにも見受けられる。いずれにしても、使用頻度の観点からすると、当接頭辞のプロトタイプは、1. RESULT であると思われる。

また、動詞接頭辞 *za-* に関しても同様にデータベースを作成して分析を試みているが、意味の数が多く、放射状カテゴリーの検討は困難であり、語彙学習のために接頭辞を学ぶ必要性は *no-* よりも低いと判断した：Н СССР (1980) や Барыкина и Добровольская (2015) は、「向こう側への移動」、「動作の開始」、「覆う動作」を始め、約 10 の意味を挙げているが、意味拡張がうまく説明できる *za-* の放射状カテゴリーは確定できなかった。この接頭辞の分析は今後も継続していく。

4. 研究成果

分析の結果、学習価値の高い *no-* の意味として、まず 1. RESULT が挙げられる。これは、ロシア語学習で非常に重要な位置を占める体のペアの項目と密接に関連している。対象が初級・中級の学習者であっても、出会う頻度の高さを考慮すると、この純粹に体的な接頭辞として機能する *no-* の知識は無駄にはならない。1. RESULT の意味・用法は教科書に記載されていない場合がほとんどであるが、体のペアの学習時に不完了体から完了体を形成する接頭辞として *no-* を意識させるべきであろう。これに続く 2. START であるが、これも重要な学習事項である移動動詞と密接な関係にあるため、導入する価値は低くないと考える。ただし、1. RESULT とは異なり *поехать, пойти, повезти* といった移動を表す限られた動詞内でしか確認されない。3. SOME の生起頻度も決して低くはない。一方で、4. DISTRIBUTE と 5. SLIGHT などの研究書や参考書が提示する *no-* の意味は、少なくとも高頻度語の中で現れる機会は非常に少ないため、初級の段階では導入する必要性は低いことがわかった。

上記分析結果は、語彙力増加と動詞の体の理解のために、教科書や授業で導入すべきであると主張するに足るデータを提供していると考えられる。

参考文献

Janda, L.A., J., Kuznetsova, O., Lyashevskaya, A., Makarova, T., Nessel, S., Sokolova. 2013. *Why Russian aspectual prefixes aren't empty: Prefixes as verb classifiers*, Bloomington: Slavica.

АН СССР. 1980. *Русская грамматика, т.1*, М.: Наука.

Барыкина, А.Н., В.В., Добровольская. 2015. *Изучаем глагольные приставки, 3-е изд.*, СПб: Златоуст.

Зализняк, А.А. 1995. “Опыт моделирования семантики приставочных глаголов в русском языке” *Russian linguistics*, 19(2), С.143-185.

Кронгауз, М.А. 1995. “Приставки и глаголы: Грамматика сочетаемости”. *Семиотика и информатика*, 34, С.32-57.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐山豪太	4. 巻 28号
2. 論文標題 学習価値の高い動詞接頭辞の選定－コーパスが提示する頻度データに基づいて－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ロシア語研究「木二会」年報	6. 最初と最後の頁 129-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐山豪太	4. 巻 11号
2. 論文標題 教育文法における派生接辞の意味記述の重要性 - 動詞接頭辞 - の分析を例に -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ロシア語教育研究	6. 最初と最後の頁 査読中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐山豪太
2. 発表標題 認知言語学に基づいた動詞接頭辞の意味分析
3. 学会等名 日本ロシア語教育研究会東日本地区2019年度研究例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林田理恵, 佐山豪太
2. 発表標題 apaneseRussianForeignLanguageLearnerCorpusの概要と今後の展望について
3. 学会等名 日本ロシア語教育研究会東日本地区2019年度研究例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----